

阪田美枝さんを偲ぶ：唄われた「日本の心」を後世へ

佐藤 翔

2021年11月1日、本学図書館情報学コースの修了生である阪田美枝氏が逝去された。享年83歳であった。同志社大学図書館司書課程を代表して、また大変お世話になり、そのご活躍に魅せられた一人の後進として、謹んで哀悼の意を表します。

阪田さん⁽¹⁾には本年報第20号で『紙漉き唄』の採集をして」と題したご寄稿をいただき⁽²⁾、また39号でも、『日本の心』を追い求めて」と題してそれまでのご活動に関しておまとめいただいている⁽³⁾。阪田さんの想いにあふれた素晴らしい文章で、未読の方にはぜひお読みいただきたいが、本稿でもあらためて阪田さんのご経歴に触れさせていただきたい。

阪田さんは1961年に同志社大学文学部社会学科社会福祉学専攻を卒業後、京都ホテルでのご勤務を経て、1963年から2000年まで、同志社女子大学に勤められた。その傍らで全国の紙漉き和紙の村々を回られ、失われつつあった紙漉き唄を採集し、1992年『日本の紙漉き唄』を出版される。さらにその出版をきっかけに同様に消えつつあった酒造り唄の採集事業も手掛けられ、1999年に『定本 日本の酒造り唄』として刊行された。同書による日本酒大賞功労賞も受賞されている。2011年には「一日本の心—2000年紀『和紙総鑑』全12巻」も刊行され、さらに2013年春には英国で和紙展覧会も開催された。以上のご活躍・ご活動についての詳細は前述のご寄稿にもつづられている。

そのほかに1999年に2000年紀和紙委員会事務局長、2005年に「日本酒で乾杯推進100人委員会」委員、2011年に同志社同窓会京都支部副会長に就任。2003年から2010年までNPO 法人三味線音楽普及の会理事（京都支部長）、2007年から2010年まで全国手すき和紙連合会事務局長、2008年から2011年まで法人同志社理事・評議員を歴任されるなど、幅広くご活躍された。

そして2019年4月より阪田さんは同志社大学総合政策科学研究科 総合政策学専攻図書館情報学コースに入学された。80歳での大学院進学は新聞・テレビ等のメディアでも取り上げられている。入学後の2019年5月23日にはジャズピアニスト・山下洋輔氏との協力の下、「山下洋輔ジャズピアノコンサート『造漉創』（つくる）with 阪田美枝」を開催、第一部では阪田さんが紙漉き唄・酒造り唄について講演され、第二部では山下

氏が月桂冠酒唄保存会の酒造り唄との共演を披露された。さらに同年8月23日には神奈川県立音楽堂において、アフタヌーン・コンサート 山田和樹指揮 東京混声合唱団「合唱 meets ジャズ！」の中で、阪田さんが採集された紙漉き唄をアレンジした合唱が唄われた。2021年3月、修士論文「紙漉き唄と酒造り唄の分類体系の構築と適用」を提出され、図書館情報学コースを修了された。

以下、本稿では、本学図書館司書課程および佐藤個人と阪田さんのかかわり、図書館情報学コースに入学される前後からのご活動、そしてご執筆された修士論文の内容について振り返らせていただきたい。

きっかけ、ご寄稿、ご講演

佐藤が阪田さんに初めてお会いしたのは2013年、阪田さんの元にあった故 鈴木幸久先生（図書館学者。京都外国語大学図書館長、同大学学長を歴任）が遺された資料群を本学司書課程にお預けにいらした際であった。ご自身が運転する車でお越しであったと記憶している。段ボール箱に入った資料をお持ちになったほかに、英国での和紙展覧会に関する阪田さんご自身のお写真等もお持ちでいらした。その日、初めてお会いした自分は、和紙展覧会のお話はもちろん、『日本の紙漉き唄』や『定本 日本の酒造り唄』、『和紙總鑑』刊行といった阪田さんのご活躍をお聞きし、大いに感銘を受けた。とりわけ全国を巡られ、その土地土地で、事前の段階では覚えている人がまだいるかも定かではない紙漉き唄を採集されたお話には感動するばかりであった。当時、自分は着任したばかりで、それまで担当したことのない図書・図書館史の授業もおこなうようになっていたところであった。思いもよらず残る記録もある一方で、ある時期には当たり前であった文化が、当たり前であるがゆえに誰にも記録されず、後の世ではよくわからなくなってしまふ例は枚挙にいとまがない。阪田さんご自身も、長唄『加美の里』について、同志社大学の書庫でその歌詞と運命的に出会いながらも、失われてしまった曲がわからなかった、という印象的なご経験を語られている。かつて日本に存在した紙漉き唄の多くも、曲も歌詞も記憶の中にしかなく、失われてしまうはずの存在であった。しかし阪田さんの類まれなる行動力によって、多くの唄が記録された。自分のような、得られる範囲のデータを分析して成果を量産しようとするようなタイプの研究者にとって、阪田さんのご活動はとて真似のできない、真なる偉業と感じられた。そうしてその年、初めて編集に携わることになった『同志社大学図書館学年報』に、ぜひご寄稿いただきたいと阪田さんをお願いしたのであった。結果、お寄せいただいた原稿も本当に素晴らしいもので、一つの事柄から次々と新たな事業へと発展していく、阪田さんのご活躍の広がりには驚かされる内容であった。

その後、2015年には自分が担当する図書・図書館史の授業の一環として、阪田さんにご講演をお願いした。阪田さんには多くの配布資料を自らご持参いただき、また授業終了後には参加学生たちを集めて記念撮影もなさっていた。その撮影に学生が喜んで参加していた様子もよく覚えている。実際に紙漉き唄を採集された際の映像も踏まえたご講演は大好評で、学生たちの感想文にも常でない、感動が綴られたものが多かった。

図書館情報学コースへのご入学

阪田さんが採集された紙漉き唄・酒造り唄は前述のとおり、『日本の紙漉き唄』、『定本 日本の酒造り唄』としてまとめられ出版されている。CDも付与されており、音声も聞くことができるが、阪田さんが採集活動の中で撮影されていた映像データはその中には含まれていない。阪田さんはそのことを気にかけており、ご友人のご協力も得ながらビデオカメラデータのDVD化作業等も進められながら、さらにそれをデジタルアーカイブとするにはどうしたらよいかと考えられてもいる、と常々お話であった。ご講演の中等で自分も幾度か、部分的に動画を拝見したが、そこには音声だけでは伝えきれないある種の「迫力」がある。映像も含めたデジタルアーカイブを、というお考えはごもっともであった。

阪田さんから、図書館情報学コースへのご入学にご興味がおありである、とうかがったのは2018年の図書館ガイダンス・ホームカミングデー後の懇親会でのことであった。その場でご病気のことでうかがったかは覚えていないが、少なくとも後により詳しくご相談を受けた際には、医師から余命3年との診断を受けられた、というお話もうかがっていた。眼前でこれまで集められた唄のアーカイブ化について情熱的に語り、その事業を進めるために80歳にして大学院に進学しようという方が、大病を患われているということになかなか現実感を持つことができなかつた。その後、ご病状が悪化され、お体の自由がきかないご様子を何度も目の当たりにしたにもかかわらず、今に至るまでどこかで信じられない気持ちがある。阪田さんのパイタリティ……ご病気のことを考えればこの言い方はおかしいのだが、しかし、どうしてもそう表現したくなる……の前には、病でさえその歩みを止めることはできないのではないかと思えていた。

実際に入学準備を進めるにあたってご相談に乗らせていただいた折に、てっきり社会人院生は面接だけだろうと思っていたら論述試験もあった、という自分のうっかりで阪田さんを大いに困らせたりもしながら、最後は無事に合格された。ちょうどお孫さんのお一人が学部に入學されると同時の大学院進学ということで、この時点でニュースでも取り上げられるなど、阪田さんは総合政策科学研究科でも話題の人となられた。図書館情報学コース以外の科目も受講され、またコース内の授業でも積極的にご発言され、

授業外の時間でも他の学生と盛んに交流された阪田さんは、あっという間に図書館情報学コースの人の輪の中心となられた。それだけではなく、学部の図書館情報学勉強会 DUALIS の学生たちとも仲良くなり、入学された2019年の6月には、阪田さんの琵琶湖畔のご自宅に学生たちや自分、さらに妻子もお招きいただき、バーベキューの会を開催されるほどであった。阪田さんがいらっしゃらなければ妻子連れで DUALIS のバーベキューに参加することはなかったであろう……と考えると、阪田さんによってご本人にとどまらない、人の交流が生まれていた。さらに同年9月には例年、筑波大学の逸村裕教授研究室と、本学原田隆史先生の研究室が合同で開催しているゼミ合宿にも参加され、同志社からの参加者がおそろいの衣装を着る出し物も独自にご準備されるなど、ただ修士論文を書くためだけではなく、大学院生として充実した活動をなさっていた。2020年は COVID-19のために最小限の交流の機会しか設けられなかったことが悔やまれる。

修士論文「紙漉き唄と酒造り唄の分類体系の構築と適用」

そうして多くの授業や課外活動もなさりながら、着実に準備を進められた修士論文について、2020年度は十分に時間をかけられながら執筆を進められ、無事に2年で修士論文を提出された。修士論文のテーマはデジタルアーカイブ化それ自体ではなく（デジタルアーカイブ構築は重要な事業であるが、それ単体では研究として、修士論文としては成立しにくい）、デジタルアーカイブ化をにらんで紙漉き唄・酒造り唄の体系化を進めることであり、具体的には検索のための分類方法を考え、実際にこれまでに採集された唄に付与し、実用性を検証することとされた。分類といっても日本十進分類法のような、実物を並べることを前提としたもの（いわゆる書架分類）ではなく、デジタルアーカイブの検索のみを念頭においたいわゆる書誌分類のようなものであり、階層分類ではなく多次元・合成型の分類法を採用された。イメージとしては近年、多くのデータベースで実装されている、検索結果の絞り込みのためのファセットに近いものである。この方法を採用されるにあたっては、図書館情報学コースの授業もご担当いただいていた、近畿大学の田窪直規先生から授業内外で多くのご指導をいただいたとのことであった。実際の執筆にあたっては指導教員の原田隆史先生に加え、微力ながら自分も相談に乗らせていただきながら作業を進めていった。また、作業アルバイトとして前述の DUALIS の学生に協力を依頼する場面もあった。しかし作業の核心は当然ながら、執筆するご本人である阪田さんがおこなわれる。分類は主として歌詞の内容に基づいておこなわれたが、ただ『日本の紙漉き唄』と『定本 日本の酒造り唄』の書籍からテキストを起こすのではなく、あらためて音源を確認され、必要に応じ訂正も加えながら作業されたとのこと

であった。ここでもやはり「バイタリティ」と表現したくなる、阪田さんの唄研究にかける、妥協を許さない情熱が発揮されていた。

完成した論文の中では、構築された分類体系の実用性・問題点を論じるのみならず、実際に分類を付与した結果として見えてきた、紙漉き唄・酒造り唄の特徴についても語られた。もともと、これまで採集された唄について体系化されたい、というのも大学院進学の一動機の一つとうかがっていたが、実際に完成した論文はそれぞれの唄の特徴を鮮やかに描き出すものとなっていた。特に歌詞に唄われた「想い」の分析が興味深く、紙漉き唄が恋心や紙漉きの苦勞を唄うものが多い一方で、酒造り唄に恋は少なく、苦勞・嘆きも少なく、祈りや技への誇りが中心であった、という。単独でおこなう家内制手工業で女性も携わることが多い紙漉きと、男社会の共同作業である酒造りの、担い手たちの文化の違いが唄の違いに鮮やかに現れている。それがわかるのは、阪田さんが唄を採集されたからであり、その分類体系を構築され、実際に一つずつの歌詞を見ながら分類ラベルを付与されたからである。阪田さんはしばしば、日本の文化、日本の心が唄の中には根付いている、それを残したいとおっしゃっていたが、まさにその通りのことをなさったのである。

これからありうるはずであったご活躍について

修士論文で構築された分類体系は、デジタルアーカイブに付与することを念頭におかれたものであった。今後はこれを踏まえて実際にデジタルアーカイブを構築し、そこに分類を付与することを想定されていた。また、修士論文自体も改稿され、『同志社図書館情報学』等に掲載されることを検討されていた。後者はできれば次号すぐにもでも対応させていただきたく、また前者についても阪田さんのご遺志として、なんらかの形で実現につなげていければと考えている。

阪田さんのお考えはそれにはとどまらず、前述の筑波大学・逸村裕先生を通じて博士後期課程への進学もご検討されており、また日本における女性の仕事に関する研究へのご参画、あるいはこれまでのご活動の映画化等のお話もあったという。そのすべては当然、今後ご協力させていただくであろう物事と考えていたが、それはかなわなかった。しかし阪田さんが亡くなられた後も、阪田さんが採集・出版された唄、記録されたご活動、そして構築された分類体系は残り、参照され、過去の文化の理解や、今後の新たな研究に活用されていくこととなる。それこそが「日本の心」を後世に伝えるという、阪田さんのご活動の大いなる意義であり、あらためてその偉業に敬意を表すとともに、最後に一個人としても、感謝の意を示したい。

これまで本当にありがとうございました。

注

- (1) ご本人はご生前、幾度も「美枝ちゃんって呼んで」とおっしゃっていましたが、さすがにそうはお呼びしないままとなってしまいました。本稿でも「阪田さん」で通させていただきます。
- (2) 阪田美枝, 「紙漉き唄」の採集をして, 同志社大学図書館学年報, 1994, no.20, p.16-29.
- (3) 阪田美枝, 「日本の心」を追い求めて, 同志社大学図書館学年報, 2014, no.39, p.53-68.

(さとう しょう。免許資格課程センター准教授)



学位授与式にて、八田総長と